

**立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）**  
**大学院生研究**  
**2008年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院 文学研究科	研究科	組織神学	専攻
<b>指導教員</b>	所属・職名	氏 名		
	文学部准教授	市川 誠 印		
<b>自然・人文の別</b>	自然 ・ <u>人文</u>	<b>個人・共同の別</b>	<u>個人</u> ・ 共同 名	
<b>研究課題名</b>	日本におけるキリスト教教育の質的研究の試み～玉川聖学院を事例として～			
<b>研究代表者</b>	在籍研究科・専攻・学年	氏 名		
	文学研究科組織神学専攻博士課程前期課程 3年	久保 彩奈 印		
<b>研究組織</b>	在籍研究科・専攻・学年	氏 名		
<b>研究期間</b>	2008 年度			
<b>研究経費</b>	200 千円			

**研究の概要** (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

これまで日本近現代キリスト教史研究には多くの蓄積があるが、谷口茂壽(1895—1973)に関しては文書の整理、編集というかたちでしか為されていなかった。そのため谷口の扱いは「玉川聖学院創設者」、「日本神の教会連盟初期指導者」として偉人化の傾向があり、また谷口の著作内容と比べ多くの不一致がある。

そこで本研究においては谷口の教会観及び教育観を、文書伝道活動や牧会活動を介して発展した交友関係からの影響を探りながら、玉川聖学院創設に至るまでの経緯を読み直すこと、また日本キリスト教史における谷口の位置づけをすることを目的とし、行った。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ 谷口茂壽 ] [ 日本神の教会連盟 ] [ 日本キリスト教史 ]

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)

これまで日本近現代キリスト教史研究は多くの蓄積と緻密な考証がされてきたが、いまだ空白の部分があることも事実である。谷口茂壽(1895—1973)、また彼が属した日本神の教会連盟に関する研究もその空白部分の一つといえる。

これまでの谷口研究においては、彼がユニテリアン的な信仰から劇的な回心体験をし、内村鑑三を中心とする無教会主義へと傾倒、関東大震災を神の啓示であるとうけとめ文書伝道家へと転身、その後日本神の教会連盟の教会観に共鳴し、初期指導者として、また東京都私立玉川聖学院創設者、初代学院長として運営に従事した人物として描かれてきた。

このように描かれた谷口の姿は、玉川聖学院及び日本神の教会連盟が文書の整理というかたちで学校史、教会史の編纂として行ってきたことに起因している。主要な先行研究としては玉川聖学院宗教教育研修委員会による『人と信仰』(2001年)、日本神の教会連盟『宣教100年の歩み』(2008年)が挙げられる。これらの先行研究は、谷口の著書に監修されている回顧録的著作を基になされており、また生前の谷口と交友があった人物や学校職員、教会関係者、そして遺族等の協力により執筆されている。従って谷口の扱いは「学院創設者」、「初期指導者」として偉人化の傾向があること、また著者が内部者のためか、谷口の著作内容と比べ多くの不一致があることが資料分析の結果判明した。

そこで本研究においては谷口の教会観及び教育観を、文書伝道活動や牧会活動を介して発展した交友関係からの影響を探りながら日本キリスト教史における谷口の位置づけをすることを目的とし行った。

現時点では結論を出すに至らない点もあるが、明確となった点は以下である。

まず谷口自身の著作において青年期の自らの信仰をユニテリアン的な信仰と説明しているが、その間彼が属した大阪天満教会で受洗していること、また「ユニテリアン」の定義が彼自身曖昧であることを鑑みると疑わしい。また谷口の「回心」体験に関しても複数回確認することが出来た。従って藤井武の著作を通しての「回心」体験は、彼の信仰を生成し、後に東京帝国大学へと転学し内村鑑三の師事を受けたいと行動する一因とは成り得たが、藤井の著作のみを原因とするには不十分だと考えられる。またこれまでの研究では内村鑑三の影響を受けたとされているが、詳細は不明確であり、むしろ谷口が「神の教会」を熱望する要因となったと考えられる。

関東大震災を啓示と受け止め、文書伝道家に転身したというこれまでの研究も、彼の著作と不一致を起している。谷口は関東大震災以前から病気を理由に療養生活を送っており、大阪天満教会牧師でありのちに霊化運動を標榜し関東を中心に活動した武本喜代蔵既によって「神癒」体験、また「回心」体験をしたことにより、文書伝道家へと転身していたことが分かった。しかし武本喜代蔵に関しての資料が少なく、谷口と武本の詳細な関係は未だ不明瞭な点が多いため、今後の研究課題として保留した。

その後の文書伝道家としての活動においては、その多くを青木澄十郎と共にし、また「家の教会」である横浜イエス・キリスト教会における教師的活動を通して、谷口は教会観を育てていったと考えられる。また谷口は矢島宇吉らと出会い、日本神の教会連盟に属することとなるが、教会、教派に対して引き続き寛容であった。従って自らの信仰を具現化させるために日本神の教会連盟に属したということがいえる。

上述したように、谷口の著作や資料の分析から、これまでの他の機関による研究成果とは異なる点が明らかになった。

研究成果の概要 つづき

※ この(様式 2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式)を添付すること。